

会津嶺

2025. 6. 23

会津に行くことがある。会津若松だったり喜多方だったり、それ以外だったりする。ふとお店に入る。小冊子が置かれてあることがある。表紙には、「会津嶺（あいづね）」というタイトルがついている。会津の方にとっては、見慣れたものだろう。

いわゆるタウン誌、シティ情報誌の類いとは趣が違う。まず小さい。小型である。そして、文字、文章が多い。お店の紹介などが中心ではなく、読み物なのだと認識している。そこがよい。

この前もたまたま「会津嶺」と出合った。2025年4月号である。読んでみると、「風・奥会津」というコーナーが出てきた。その文章は、『奥会津』の“奥”をどう解釈するか。」で始まっていた。惹かれるものがあつた。

二度ほど、単身赴任をしたことがある。どちらも会津だった。最初は南会津だった。二度目は奥会津だった。そうはいっても、自分の中に、南会津と奥会津の明確な線引きがあるわけではない。たぶん、南会津を奥会津、奥会津を南会津といっても、さほどの違和感はないのかもしれない。地図を見ると、奥会津は会津地方の南に位置している。

南会津と奥会津では、言葉の響きが違う。「南」と「奥」の違いである。奥には、辺境の地というイメージがある。だが、それだけではない。深奥あるいは心奥というのだろうか。人間の生き方の最も深いところに辿り着ける場所のように思える。

南会津もそうなのだが、特に奥会津では自然の営みや歳時などへの敬虔な姿勢が感じられた。自然に添い、自然と共に暮らす日々の生活の中に、人間本来の生き方の品格のようなものを見ることができた。

奥会津の町や村には、彩り豊かな歳時が散りばめられている。今も古き良き姿が残っている。歳時には、すべからく祈りがついている。恵みと災いの表裏一体をなす自然の営みを疎かにすることなど決してできないという歴史を背負っているように思う。

どんなに文明が進んでも、便利で効率のよい日常を得たとしても、自然の脅威には抗えない。町や村の高齢化率の高さが話題になることがある。経験豊富な人生のベテランの方々に教を乞うことも重要なことである。

古から自然とともに生きてきた会津の豊かな魂のようなものが、奥会津では今でも残っているような気がしてならない。きっと、自分の中に、会津の中でも奥会津を特別なところに位置づけようとしている意識があるのだろう。それは、奥会津への畏敬の念に近いものとも言える。

「会津嶺」のおかげで、2つの会津について改めて考えることができた。今度、また会津に行ったときには、「会津嶺」を探してしまいそうである。